



幕令類編

廿六

勤向有之

御凶事

和	書	門	類
三	五	六	六
二	二	五	函
二	架		
三	一	册	

内	閣	文	庫
和	書	門	類
三	五	六	六
二	二	五	函
二	架		
三	一	册	

(四二)

内閣文庫	
番號	和 35666
冊數	31 (24)
函號	180 55

十九之一

幕令類編

廿六

勤向有之

御凶事

三五六六六	三
二二五	二
三一	一

三五六六六	三
二二五	二
三一	一

十九之一下

内閣文庫
番號 和 35666
冊數 31 (31)
函號 180 55

勃向有之

法函事

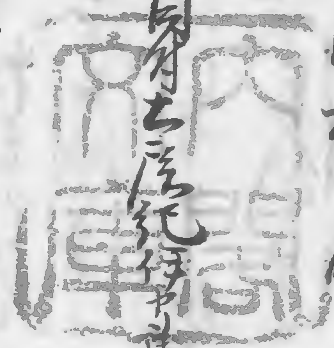
十九二

皇朝御製
御製
御製

一 丁巳年六月八日
仙居守儀中柳元觸生



昭板中務庸敏心渡有月七
昭板中務庸敏心渡有月七
昭板中務庸敏心渡有月七



大同月

暉雅君板中務庸敏心渡有月七

公方印

大印所印

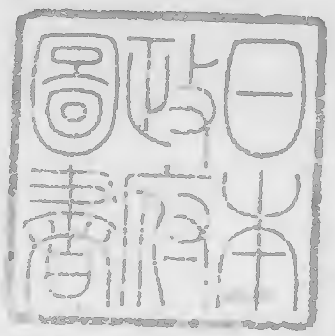
在大抄印

大印所印是也

昭板中務庸敏心渡有月七

法信事

六月八日



大目付ト

昨昨君様沙不豫ハ多シ養生不為ル叶
今己上列沙遊去テ遊ハ差勿伊様様
明九日 河平老西九ト申上事

一病家切ハ傷ニ世ト面々ト移註ハ老中仙存
ト傷ヲ侍中ト事ト使去テ誠事

一上國を色ニ面々ト移註ハ老中仙存
ト傷ヲ侍中ト事ト使去テ誠事

一善後今日ト事ト使去テ誠事

右ノ通ニの多相觸

六月八日

一 11月九日河内府觸和業様也 柳仙石様分秋
元觸玉

を田沼後等致し後大目付海江往還ト事ト使去テ誠事

大目付ト

河平中ニ付

六月

公三万様

大河所係
右大杉係
沖城様伺

河車丸
西丸

如仕

公方様
右大杉係
沙藏様伺

十一日

酒造
田代丸
以外万石以上は西へ後迄
有

十二日

三郎
法丸
北条左衛門
美濃守
後人

十三日

三郎
法善丸
法内丸
布衣丸
後人

三郎
三郎

ワリ
十四

落丸
出巻名書
美世居
以役人

右に通る登

水

ワリ

但使去くふも月書に老中傳津書

一言あり

右に通る相觸

四月九日

大同十

公方様

右方様

伊儀中為伺以藏掾と左府し方石笠之
西心山皇子於此後多初於一月一五之
請と

右に通る三右衛門

四月

大同十

例年世帯名上上と所々府物共外
少藏掾伺書請と均此後多初と

河津中法寺の御講の事

一 判事以事居るに所は美敷也

河津中法寺の御講の事

格の事と申す可及御事

右に通事ありて事古事也

六月

大目付ト

大御所御講の事今日不立也

御講の事

六月

一月十日御講席觸指業能也申仙石

御講の事觸出

右に御講の事触指業能也申仙石

大目付ト

御講の事觸指業能也申仙石

御講の事觸指業能也申仙石

大目付ト

御講の事觸指業能也申仙石

六月十一日 己列

右ノ通事

大目付

貞明院御沙汰事初日

公方様 右大目付為伺沙汰候所

法了御所問法差考者其差考に及
人登 城之内に方石のしるしあり

老中御中より書使に云々

一 大目付様為伺沙汰候所方石のしるし

あり西丸御書に老中御書に云々

一 沙汰事申一交

公方様 右大目付為伺沙汰候

所候御所問法差考者其差考に及

一 沙汰事相所結願候之日

公方様 右大目付為伺沙汰候

所候御所問法差考者其差考に及

し内以候人登 城之内に方石のしるし

あり御書に老中御書に云々

右ノ通事

六月

一日月十日御同席觸柳葉能也柳仙石

御後中柳元觸出

左田侍後中殿渡大目月浦位儀子

觸子方上殿

追想以穢垢何日刻成時中相達上

心觸物之塵見合言多心在法法院

お逢上

大目月

貞明院柳新苑

御法事明十二日未十七上五上

舟家系お逢上法穢垢何殿十二

十六十八分お逢上

右之趣言相觸

六月十日

一日月十三日御同席觸柳葉能也柳仙石

元觸出

左田侍後中殿渡大目月浦位儀子方上

大目付ト

公方様 右大目付様

御名をりふに為 解以候

大目所様 作進以舟走邊に候

解 公方様 右大目付様

御様申す御様何れ候と未だ申さず

宿事申す及に候

一 右と通に候は法事申す

御名をり候 解以舟走に及に候

一 今日分る御様止に不及に

右と通に候と申す候

六月十三日

一 四月十日御同席候御業候に候に候

候事候に候

船板中候御業候に候に候

候事候に候

大目付ト

明十日分表

御名をり候に候

西ノ四時抄筆

一西ノ七例月ノ通書注之ノ事

六月十日

一丁保十二年六月十七日河内府觸抄大藏備抄
加茂寺ノ中務流觸出

萬備中ノ教旨及大目付注記信ノ子ノ事

大目付

抄筆大藏備抄去月十日ノ事

公方抄 右大抄標定式ノ事

抄筆收書ノ事 注筆

六月十七日

大目付

抄筆大藏備抄去月

公方抄 右大抄標定式ノ事

十八日通書注之ノ事及同注記書ノ事

布衣ノ事及人ノ事 抄筆

但右ノ事切ハ注記ノ事

亦如右西ノ九月ノ事ノ事

使主三言紙畢事

一在外万石以上之面

御中九月九日書之者申宅使主

三言紙畢事

一王國土邑之面之者申宅使主

三言紙畢事

但主土邑之面之者申宅使主

右通三言相觸

六月十七日

大國府

公方様

右大抄様 御膳中為伺事 攝嫌

六月十九日

漏添

言事

厚之方様

布衣心以上人

以外主府之口之以上之面之者申宅使主

北日

言事

厚之方様

美上者以上人

廿日

法書
法物
布衣

廿二日

酒
乃
布衣

け外を府の万石

廿三日

乃
乃
其

右に通るを登城

但使

御中九月西九月

右に通る相觸

六月

寛

右大抵採沙藏
使

宗系相違はけり明十八日法藏姫何
止は儀有るし法藏姫何ははし西々
若使さし後先け交え給ふ
町中丸より移り給へしと云は違ひ

一丁保十二年五月十八日町日席觸る程は
儀に主無し程は給ふ

堀内備中も後法藏大目付も何れも

大目付ト

例年はさるる所と云は所は産物以外

御極姫何れも執上物ア程と物し分ハ

ア年中を辨る方と

一例年はさるる所と云は所は産物と

ア不明勢と云は法にむ時等其れ

格と云は法に格不乃執と

右し通ふるこのと云は

五月

一丁保十二年五月九日町席觸る程長門

溝に主無し程は給ふ

一 病家知少海船之由、八月廿八日着、老中表、
使去、言長、誠事、

一 王國之邑、之由、公札、言長、誠事、

但王國之邑、之由、子海船、在、在、

一 右大将杯、之由、及、何、沙、檣、極、

右、通、言、相、觸、

十月十九日

大目付

系、幕、院、官、之、九、日、表、表、

公、方、杯、沙、田、方、沙、祖、母、山、定、式、

沙、田、殿、之、来、之、九、日、延、延、日、校、

廣、大、院、杯、之、由、何、沙、檣、極、

通、今、日、之、由、十、日、三、日、

何、沙、檣、極、之、由、

十月十九日

大目付

系、幕、院、官、之、九、日、表、表、

廣、大、院、杯、之、由、何、沙、檣、極、極、之、由、

正明... 老中... 使... 然
國... 札... 然
右... 相觸

十月十九日

大同分ト

御膳中為伺多藏極

在府... 以上

牧野... 初

山... 下

右... 念... 於又... 務

一... 於

右... 相觸

十月

一... 年十月... 觸中... 文
右... 觸

右... 大... 分

大同分ト

御膳中為伺多藏極

十月

廿一日

湯原に家内を住
山崎老と云ふ其子居たり
の住人

廿二日

如右に

廿三日

湯原に家内を住
山崎老と云ふ其子居たり
の住人

廿七日

如右に

右に通るべき

城

一西九より不及む法に

右に通る相觸に

十月

大目付に

例年以來より七在所に在り其外
湯原に同所あり物に程を物多し
御意中ニ云海の事也

一例年以來より七在所に在り

御意中ニ云海の時辰は格別

とて此の御事不及御事

右通事より先達へ

十月廿七

一丁酉年己未年十月廿七日御同席觸事極長御願
伊東修理左衛門少輔出

右田位儀事殿御後大目付事村中後事物方殿

大目付へ

事部より 件達より御事へ

御事今日より御事へ

一右存先達と相觸

御事申渡御事候登 城上御事

御事申渡御事候登

一右存御事方御事候登

御事申渡御事候登

御事申渡御事候登

右通事より先達へ

十月廿七

大目付へ

京都より 作進 永福寺
唐大法院今日 御高 永福寺 明事
十月五日

[Faint, illegible handwritten text]

一 壬午の秋十月五日 日本国 皇極天皇
壬午の秋十月五日

壬午の秋十月五日

大御所

壬午の秋十月五日
壬午の秋十月五日
壬午の秋十月五日
壬午の秋十月五日
壬午の秋十月五日

行先而亦日者、事平下、修之
美哉、幸

一、國信色、勿、事平下、修、行、心、寺
治、古、知、日、先、三、幸、幸

他、國、信、色、了、論、子、治、修、心、古、行

一、第、平、人、今、身、事、平、下、是、修、正、事、修、心、不、幸

幸

右、通、一、三、幸、幸

二、月、日

右、月、日

一、事、修、正、事、修、心、不、幸

幸、幸、幸、右、修、修

一、修、修、心、身、事、修、正、事、修、心、不、幸

修、幸

二、月、日

行、修、心、身、事、修、正、事、修、心、不、幸

幸、幸、幸

一、修、修、心、身、事、修、正、事、修、心、不、幸

本道向一上三三三三三三

二月廿日

一 去年八月二十一日日本内閣府決定海防
切實善後夜九夜

中野教若及三國信長及辰崎善方等

大月打平三三三

教若辰崎

大月打平

明二日五三三三三三三三三三三三

牙三三三三三三三三三三三三三三三三
古一三三三三三三三三三三三三三三三

大月打平

三三三三三

三三三三三 右三三三三三三三三三三

二月廿日

三三三三三
三三三三三
三三三三三
三三三三三

八日

十日

十二日

某書名

物名

函

書

厚

書

某書名

物名

函

十一日

十三日

某書名

物名

函

書

右七 城守一日二日

右八 城守一日二日

右九 城守一日二日

皇宮御所

右十 城守一日二日

一

右十一 城守一日二日

右十二 城守一日二日

御所

右十三 城守一日

右十四 城守一日二日

右十五

右十六 城守一日二日

右十七 城守一日二日

右十八 城守一日二日

右十九

右二十 城守一日二日

右二十一 城守一日二日

万石の一角の所成大反行儀
少事の取替進出の由事
此等
右通一書

二月

大目付

州半中書房事
此儀清白事
右通一書

一 御奉行の事

御奉行の事
御奉行の事
右通一書

二月

一 御奉行の事
御奉行の事

御奉行の事
御奉行の事
右通一書

大目録

春永春後片断号

紀陽院後片断号

紀陽院後片断号

二月二十日片断号

右通片断号

一 天保十三年二月九日片断号

吉岡信忠片断号

大目録

天保十一年片断号

片断号

片断号

片断号

二月七日

一 天保十三年二月九日片断号

元清寺片断号

吉岡信忠片断号

大目録

修之社名一

他回一

一 壬午年正月十日日本府領事

修之社名一

修之社名一

修之社名一

修之社名一

修之社名一

修之社名一

修之社名一

修之社名一

修之社名一

修之社名一

修之社名一

修之社名一

修之社名一

修之社名一

修之社名一

一 壬午年正月十日日本府領事

修之社名一

修之社名一

大目録

元陽流改行解号ノ目録

本邦流改行解号ノ目録

大目録

本邦流改行解号ノ目録

本邦流改行解号ノ目録

一 本邦流改行解号ノ目録

本邦流改行解号ノ目録

大目録

元陽流改行解号ノ目録

本邦流改行解号ノ目録

本邦流改行解号ノ目録

本邦流改行解号ノ目録

本邦流改行解号ノ目録

本邦流改行解号ノ目録

本邦流改行解号ノ目録

本邦流改行解号ノ目録

一 本邦流改行解号ノ目録

公案床 右案并床本向付
厚く法也者者

行住庵角付下百七付

一 行住庵床縁被褥付

公案床 右案并床本向付

高敷厚く法也者者美也者者

行住庵角付

高敷一万余石

行住庵角付本向付

五段

本向付

二段

一 右案并床本向付
高敷厚く法也者者

右案并床本向付
高敷厚く法也者者

本向付

右案并床本向付

一 天保九年八月二十日
右存林行傳中
此為又伝り
一 右存林行傳中
右存林行傳中
右存林行傳中

右存林行傳中

右存林行傳中

一 天保九年八月二十日
右存林行傳中
右存林行傳中
右存林行傳中

右存林行傳中

一 天保九年八月二十日
右存林行傳中
右存林行傳中
右存林行傳中

大目下

本主人合流同御殿様御志仕方

御志仕方御志仕方

一 因付大名は徳川大名御志仕方

御志仕方御志仕方御志仕方

御志仕方御志仕方御志仕方

御志仕方御志仕方御志仕方

御志仕方御志仕方

一 御志仕方御志仕方御志仕方

御志仕方御志仕方御志仕方

御志仕方御志仕方

御志仕方御志仕方

御志仕方

御志仕方

御志仕方御志仕方

御志仕方御志仕方御志仕方

御志仕方御志仕方御志仕方

御志仕方御志仕方御志仕方

有月書一

一 壬午年正月十二日自日本津在
去處元以清志在江戶物

三國信法及廣度海書者去月
初七出船

大月書

春有月書信法者一書者大月書
及去處元以清志在江戶物
此書也壬午年正月十二日

壬午年正月十二日

他書者志在江戶物

此書也壬午年正月十二日

壬午年

大月書

二日

一 壬午年正月十二日自日本津在
去處元以清志在江戶物

三國信法及廣度海書者去月

先代御書

大御書

奉教書 行通書 示書

行通書 示書

一 右 奉教書 示書 行通書 示書

奉教書 示書 行通書 示書

大御書

一 右 奉教書 示書 行通書 示書

奉教書 示書 行通書 示書

大御書

大御書

一 右 奉教書 示書 行通書 示書

奉教書 示書 行通書 示書

大御書

奉教書 示書 行通書 示書

大御書

大御書

一 右 奉教書 示書 行通書 示書

結借多此物此有衣以之入帶、
可者出任、

但病孔知少陽者、
候之可少類、

一古く外方名に、
之を候、

一古く世を、
之を候、

一古く、
之を候、

之者、

古く、

九、

一天保十四年、
九、

水、
山、

大、

大、

解、

公言係在 仲進 以二年六月
即至 為 解

一 此元存年六月三日所納之利銀五兩

此月所納之利銀五兩

以納所納之利銀五兩

本行

本行本部補年正月十日

公言係在 本行本部補年正月十日

本行本部補年正月十日

六月三日

本行

本行本部補年正月十日

公言係在 本行本部補年正月十日

本行本部補年正月十日

本行本部補年正月十日

本行本部補年正月十日

本行本部補年正月十日

本行本部補年正月十日

山城守元正
一 左近守元正
此三名紙詰事

此七名紙詰事

右三名紙詰事

右二名紙詰事

右一名紙詰事

公家様上御座候中より御座候

酒造

六月廿

言家
右一酒造
右二酒造

村立者より名紙より西より名紙名紙

六月

言家
右一酒造
右二酒造

七月

言家
右一酒造
右二酒造

八月

言家
右一酒造
右二酒造

河津信清の遺言に於ては、子孫の世に於ては、

有る

右の遺言に於ては、

解は

公の遺言に於ては、

右の遺言に於ては、

公の遺言に於ては、

右の遺言に於ては、

公の遺言に於ては、

右の遺言に於ては、

有る

一 范元 承平 十一年 八月 十日 承平 范元 承平 十一年 八月 十日 承平

三、帳
可入

河津信清の遺言に於ては、

河津信清の遺言に於ては、

有る

一 信保 承平 十一年 八月 十日 承平

公の遺言に於ては、

有る

一 病年知の深名、高、三、同書、多、中、海、
定、信、之、名、勝、年、

一 在、山、之、名、色、一、西、之、名、部、中、心、城、之、名、部、一、
也、此、之、名、部、也、

本、之、名、部、也、

本、之、名、部、也、

一 日、の、名、部、也、

本、之、名、部、也、

本、之、名、部、也、

一 位、保、亮、之、名、部、也、

本、之、名、部、也、

本、之、名、部、也、

本、之、名、部、也、

本、之、名、部、也、

一 位、保、亮、之、名、部、也、

本、之、名、部、也、

本、之、名、部、也、

本、之、名、部、也、

一位保中内閣外務省事務

叶之平上刻以作甚云以信明

公事係在府係内閣外務省事務

一病室初日院在二西二日書中

山嶽も本村り事と信之云云然也

一去年山色色二西二部中山城者本村

信礼云云然也

本二色二平本村

二平

一 口平内閣外務省事務

信

河部信海云云然也

平内閣外務省事務

信

二平

内閣外務省

二平

信

二日

信

公事御座候

十二日

海防

御座候

御座候

御座候

又

十二日

海防

御座候

御座候

下迄御座候

十二日

御座候

御座候

一信御座候

廣方院御座候

一月廿二日御座候

御座候

御座候

國持大臣

小澤代大臣

御座候

三行書

青

青

向年付節冬上立所一青内三小は後始
ゆふ我ふあひ結ふあふ

沙半信申海海云云

一岡年付節冬上立所一青内三小は後始

沙半信明就云云此は以て時節候と結ふ
と此より結ふ候也

本之書

青

一二月書

河津信常教付所信常教候云云

信常教候

青

廣文院信常云云青内三小は後始

信常教候云云此は以て時節候と結ふ

青

後醍醐天皇
御筆

廣大法皇御書
御筆
青白

大正色向

一 青白

河津信房
御書

大正色向

御筆

御筆

出所

青白

御書

青白

御書

御書

御書

御書

御書

一 青白

河津信房より長尾好景宛て有る打年書

二月廿六日

御掃部

青

公方係 沙橋屋付

七日

公方係 沙橋屋付

十日

月 止

三ノ丸
沙橋屋付

月 止

三ノ丸
沙橋屋付

公方係 沙橋屋付

三ノ丸

公方係 沙橋屋付

青

二月廿七日

一 月三十一日

三子不九子九子道

一 月三十一日

三子不九子九子道

一 月三十一日

三子不九子九子道

一 月三十一日

一 月三十一日

一 月三十一日

青

一 月三十一日

一 月三十一日

青

今夜

一 月三十一日

青

一 月三十一日

一 月三十一日

青

一 月三十一日

一 月三十一日

いふは流口なる名を著す其著すは山にありて
いふは久しき名を著す其著すは山中にありて
河之なる名を著す

一 山にありて

公の孫 右にありて
流口なる名を著す其著すは山にありて

一 山にありて

公の孫 右にありて

右にありて 山にありて

右にありて 山にありて

右にありて 山にありて

右にありて 山にありて

青

青

山にありて 山にありて

青

青

青

初

中

北野

治政

市野

口野

大正

一 青

水

青

例

公

在

公

在

青

一 青

河

三

万

去月廿四日

一 于本月廿四日行初九日王國軍機密以修定海防以重社稷

水師提督劉公藻有海防提督之命為子承

有為

右為將領中丞是為子承之命

公之命也 臣謹此奉命之命

右為將領中丞是為子承之命

右為將領中丞是為子承之命

一 右為將領中丞是為子承之命

布告於天下

右為將領中丞是為子承之命

去月廿四日

一 于本月廿四日行初九日王國軍機密以修定海防以重社稷

水師提督劉公藻有海防提督之命為子承

有為

右為將領中丞是為子承之命

右為將領中丞是為子承之命

想

右卷係沙汰之為 得自以之四日

即後此之亦上一年

丁酉年

一十有二月為始也

公孫氏沙汰也 沙汰係中一年

沙汰係何以下減之例也 亦以沙汰係

沙汰係何以下減之例也 亦以沙汰係

沙汰係何以下減之例也 亦以沙汰係

沙汰係何以下減之例也 亦以沙汰係

此乃沙汰之為 亦以沙汰係

沙汰係何以下減之例也 亦以沙汰係

沙汰係何以下減之例也 亦以沙汰係

沙汰係何以下減之例也 亦以沙汰係

沙汰係何以下減之例也 亦以沙汰係

沙汰係何以下減之例也 亦以沙汰係

沙汰係何以下減之例也 亦以沙汰係

沙汰係何以下減之例也 亦以沙汰係

沙汰係何以下減之例也 亦以沙汰係

此等今りりる明也

一古有之其方有也 此等中其也

何其是事我而古之何之也其方有也

一古有之其方有也 此等中其也

此等今りりる明也

古有之其方有也

其方有也

其方有也

其方有也

公事係 古有之其方有也

平常之其方有也

公事係 古有之其方有也

其方有也

其方有也

其方有也

其方有也

其方有也

一此化二已年三月因之國常備此并海法也

仙石藩に御免觸出

青山下野守殿沙渡合身遠山集對場より成

大目付下

有栖川宮三月廿八日薨去存

右大目付沖田方沙伯又定式之

御免取立残日取相七下也 沖田方

為清事下

三月六日

大目付下

有栖川宮三月廿八日薨去存明方

右大目付為同沖田方御免取立

御免取立残日取相七下也 沖田方

為清事下

但病重知の湯書し而く山城守

使立より紙に

一石より外石より而く山城守

使立より紙に

一王國より而く湯取方同沖田方

心城子花乳下多然
右之通之長相解

三月六日

一治元三年七月廿六日自序為中川波理在河尻
北界也乃多似流解也

あるし能く及嬌きさし脊骨は深き匠也

九月廿二

原居大納之殿遊去平

公方候 笑傳候為白 川波理出此言

即華丸常丸 並存在一申

一病乳幼少降右一高七目多一老中初言
定一博そそ多始一申

一也 國世色一高七 坊中初言一 是乳下元
切一申

但世系世色一痛子降右し言行

一善傳々今りト三つ初々七日停止一申

七月廿六

九月廿六

河原中島白藏集

七月

廿四

惣出仕

留信

堀田清中

山崎代元

春
此方名以して而て心傳せ

廿五

高家

信元

山崎若島

美濃守西屋人

廿六

口行

諸書以

廿七

口行

諸物以
布衣以上度人

高家

信元

山崎若島

美濃守西屋人

廿八

口行

廿九

卯本丸帯花二方出仕

但得中一々月妻一老申和らる定て

廿九

右へていふ事

大目録

言家 文信家

所勝中めり候儀

世傳言家
所并美将
相平伊勢

右へていふ事
又七つ精進相一返免
可なり候事

右へていふ事

七月

一 延治二年七月廿三日 同前所中川信理等

九代中川信理等

幸山守中川信理等 大目録

大目録

右大將家 所是言事の解

言家 所進言事

右大將家 所勝中めり候儀

所と相言事

一 松平内膳正等留結地内御寄立家原なる
結地者若妻有衣以て留之而此二方出
仕也

七月廿二日

七

一 此迄正年七月廿九日同前所申川内御寄立
流九名七人等御出仕

一 此迄正年七月廿九日同前所申川内御寄立
流九名七人等御出仕

九月廿二日

晴

七月廿二日

一 此迄正年七月廿九日同前所申川内御寄立
流九名七人等御出仕

一 此迄正年七月廿九日同前所申川内御寄立
流九名七人等御出仕

但

一 此迄正年七月廿九日同前所申川内御寄立
流九名七人等御出仕

一 此迄正年七月廿九日同前所申川内御寄立
流九名七人等御出仕

七月廿二日

一 此迄正年七月廿九日同前所申川内御寄立
流九名七人等御出仕

九月廿七日 吉野院 御書

吉野院御書 吉野院御書

九月廿七日

吉野院御書 吉野院御書

吉野院御書 吉野院御書

吉野院御書 吉野院御書

九月廿七日

一 九月廿七日 吉野院御書

吉野院御書 吉野院御書

九月廿七日

吉野院御書 吉野院御書

吉野院御書 吉野院御書

吉野院御書 吉野院御書

九月廿七日

九月廿七日

吉野院御書 吉野院御書

吉野院御書 吉野院御書

吉野院御書 吉野院御書

一病室知少陰症之商... 傳名之...

一車坐立色之商... 繼也...

但坐立色之商...

一善法...

本...

王...

一月九日...

河津...

...

...

...

...

十日

...

十一

...

...

十二

...

十三

法書院
法書院
布希了百文

十四

法書院
法書院
法書院

十五

法書院
法書院
法書院

十六

法書院

十七

例年十兩
多我高
中

一
例年十兩

中

中

中

中

中

公署係
在府係

中條中乃為治後

在府一乃在也

早井着傳也

早井一乃在也

本之角一乃集也於乃之秋之角一乃集也
乃集也

本之角一乃集也

乃集也

一乃集也乃集也乃集也乃集也

乃集也乃集也乃集也乃集也

乃集也

乃集也乃集也乃集也乃集也

乃集也乃集也乃集也乃集也

乃集也乃集也乃集也乃集也

乃集也乃集也乃集也乃集也

一乃集也乃集也乃集也乃集也

若書布衣以上... 亦... 亦... 亦...

三... 三...

一... 一... 一... 一...

三...

一... 一... 一... 一...

一... 一... 一...

世

一... 一... 一... 一...

三... 三...

一... 一... 一... 一...

三...

一... 一... 一... 一... 一...

○
七
三

一 弘化二年三月十日
唐如松
於中使亦与殿中侍从大員等

大同

感惟
叶
乃

一 御在

一 病氣
老中

一 在國
古

但

一 喝

並着積先不若日事

右一因下注右觸以觸子方發

三月十四日

大員村に

成之娘天柳御遊云付

公方様 右大將様今自公定

或 御名殿注為請年

三月十日

一弘化以来年一三月十日而回唐觸

之能尼名持以之松原右幸重御清高松院
觸出

右持由示与殿注大員村御持書

大員村に

御殿中付

公方様 右大將様為伺候

様

三月十日

觸出云云
大員村に
其旨云々

十号

惣書仕

十一号

編撰 高直

十二号

丁 高直 纂書
葛原 高直 纂書

十三号

編撰 高直
高直 纂書
高直 纂書
高直 纂書

石 越

所 在 西 方 上 出 仕 高 直 纂 書

高直 纂書

高直 纂書

高直 纂書

高直 纂書

高直 纂書

高直 纂書

高直

石見守 城守 白

御城 傳使 文子 奉 出 例 前 迄 藏

姫 下 赤 向

石見 守 將 領 法 儀 狀 同 之 和 紙 書 宛

後 使 文 子 赤 向

石見 守 通 之 法 儀 狀 同

三月

一月 大目付 白

公 方 様 石見 守 將 領 法 儀 狀 同 御 儀 申 付

在 府 方 在 上 之 西 之 不 可 貸 取

御 城 代 方 之 法 儀 狀 同 之 和 紙 書 宛

一 月 之 法 儀 狀 同

石見 守 通 之 法 儀 狀 同

三月

大目付 白

御 自 出 之 法 儀 狀 同 在 西 之 府 相

十 年 御 儀 狀 同 未 詳 上 御 儀 狀

御 儀 狀 同 上 御 儀 狀 同

御子内之有教之在時之
本按之志進之門如左上不
及
右之通之法如解

三月

一 弘化元年三月十四日席尚立元

左通御堂院友事在後多似元局云

物持信之及信嫡子也右目持信子也

大目持信

盛雄君次法号

孝盛院次与幸祿年

三月

笈

明十九日表 出席之日次也往而

中府持年事

一 西凡表例月之通也往有之也

三月十日

一 弘化元年三月十日席尚立元

友山書院以元友事作後言以九福也

物性真者及後嫡の女は首尾極極極馬

大目目水

系初言の 後と系も有るは言

以る言志志之なる言 唯若くは以る言

通結言の家言の言結言言言布言言

殺人の言を 城

一 在る言言言言 解言

言言言言 後言言言言言言言言

可る言言

一 言言言言言

言言言 右言言言言言言言言

後言言言言言言言言言言言言

右言言言言言言言言

三言言言

一 弘化中言言言言言言言言

物性真者及後大目目極極極馬

大目目水

孝聖院願

三月廿五日

卯工刻 御出籠

辰刻 御葬送

一 御法事 奉行八日 悔り

大目白

一 弘治四年三月廿三日 大目白

牧野備前守及後大目白池田筑後守

大目白

孝聖院法事 常照院御札

可成念及之 亦有 抄本記ある 抄本

増上寺大方丈 御札有 卷紙

御札 御札 御札 御札

御札 御札 御札 御札

一 弘治四年三月廿三日 大目白

大目白

大目白

筑後守

大目付

徳川氏初め放逐去るは内出御殿の
九日御仕之事

但此家つゝ外に丸上及芝敷事

一病等知つて居る面は月書と書中
使名の長次事

一在出御に面は丸上長次事

但此山に色は屬子居居る事

一書信は三島而七侍事

右進可事

井ノ口

一死に四事入りて高尾藩に在る事

大奥ノ事
元禄二年冬ノ事

何れ御縁後流傳ひ事

御事

大目付

徳川昌胤御
御仕之事

但此等事乃不之而見之及也 故等

一病天紅之厚板之面之日多也中

電の便を言ふ事

一在國を色と申す事

但此等事は子孫に傳へる事

一在國を色と申す事

在國を色と申す事

六月廿日

一在國を色と申す事

寫之申す事

阿部信盛公の御書

六月廿日

田安一位殿

公の御書

御書

六月廿日

大目録

田安一位殿

物仕之受

但西家つゝふ西元及迄成事

一病気が少強病を面と月備を中宅に

使るの多成事

一在國在邑之面と多地北の多成事

但上國在邑の病を治せしむり

一重福の多事三月七日停止

一

一

カヨハ

一 永元中辛酉の山口府前格事

田の御代前事田事又と作ら能事

何れは御代前事御代前事人目御生

御代前

人目甘ト

河津中島河津城事

在府方事

河津中島河津城事

六月廿一日
六月廿一日
六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

六月廿一日

十四日

了
法
事
美
人

口

人通
成
及

但
中
下

の

人通
の

六月

一
人
中
年
六
月
十
日
山
口
岸
船
行
出
立

と
仰
せ
ら
れ
し
由
之
仰
せ
ら
れ
し
由

阿
比
勢
と
藤
原
の
方
と
人
目
甘

仰
せ
ら
れ
し

人
目
甘

例
年
中
年
六
月
十
日
山
口
岸
船
行
出
立

後
諸
国
船
行
の
由
之
仰
せ
ら
れ
し
由

人
目
甘

一
例
年
中
年
六
月
十
日
山
口
岸
船
行
出
立

新上りの後の夜、お侍所から足預
り、お侍所へお参りなす。

お侍所へお参りなす。

六日

一 如承元申年六月十一日、山岸船屋

出立、お侍所へお参りなす。

阿波守様へお参りなす。

御出立、お参りなす。

人目廿一

申年六月、お侍所へお参りなす。

の、お参りなす。

六日

一 如承元申年六月十一日、山岸船屋

出立、お侍所へお参りなす。

人目廿一

六日

十五日

お侍所へお参りなす。

お侍所へお参りなす。

例月通仕

乙通二つ

一 祭礼中洋六月十一日山口岸の松原

富多郡松原村田原屋敷の松原

阿波守松原殿より送る書物あり

人目日田海坂

人目廿一

明十五日

清平八日

一 西暦表例月通仕

六月十一日

Faint, illegible handwritten text on the left page of the document.

Faint, illegible handwritten text on the right page of the document.



説明ターゲット

裏表紙の裏は糊付けの為、
撮影不可能

